

梅之与四兵衛物語 梅花氷裂中冊

江戸 山東京傳編

○第一 韻孝一児得天一幸

栗野十郎左衛門へ泉州堺の目口町とふ所に住夫婦の子
葉小塗紙とう紙ととててゆきけん烟となてりが前の月さうが先
夏あひて信濃国不旅立ちや二月ぞうと過るとのども坂来すされ妻
沖津一子長吉大さくをとを氣汚ひひと人とすひ信濃国のあるの
方ふげして様子と同じりやふと堺ふ坂らにとりひにけりとば神津
親子まもく案わづひりや坂あらわらと待候けよつひと其
年より冬のをゑふやくととちよま沖津夫のゆふと昔ほつる事
也偶病ふふ一日くふおりまとつらのむとまとおうち瘦がとう

そつとこくとううづのえうけと一子長吉へ今年四十五才
かれども立ふとぐれてがてにじよたゞひまれり孝子を一頭お
父のゆくのあれさうと愁ひ一頭お母の病のおりと悲しきふれて
快氣をそしり母子連立て父のゆくと尋ねあんりの看病おこて
らどひきしくやりりひとせざれば益困窮と朝夕の烟をふをしておほ
けりう者病のつとゑく母の枕上すゆりかゞ草履草鞋とぼくわづ
男錢小少とその日とおなじ母の好みのいたと價うち食食物と
つともこれと調て食せ我ハ連日りのくらぬがちちう近村の医師の
ゆふ行掌と合せて辨し何とぞ母の病苦と救へと涙と流して
ゆびければ医師その孝心を感ド薬の價とくまと日くまことに療
じはしきされ起卧の今抱まうかの更ふ油ふ心とけ物毎不自由不
か死様ふうべ母ふ心とつみを腹なかせてハアーワジとたとひばひ様
の死理から更ことひても唯ううとあらひてつももうも氣ふさうらる様
よりては片時も病床をなきれど手と握り顔をかゞくその日の氣
ぐんようあとくしくたげぬひー快くある時代の中の物語はじて慰め
ううあーは昔ハ背と恵足をまとう織たうぬのうぶうこれとまうめ
睡ふて皆ハ我耳を母の顔ふよせてそひぶし母ふ心をつらへせとと睡
えんごくつゝうあらじ尽もぐもあらむをうーも着寒の時節からふ夜の
うう薄けり母のゆくとおつくどうがひ我衣服をぬけて母ふ
着せおのれの蓬蒿を家ふまとひて口ふ寒氣をあせぬ母の体
をそそ涙を流すをもくとぞ見者のそろばや汝はつまき寒ふ

薦蓬と水不すとひそひひ死凍死ぬ。一我のまごの汝死ばいふせんふく
我為小衣服を脱べとどとつべ長吉うらぐ手とつえそのおがせ
おもけれどもれぞうへゆきよりれじ九人の子たちの親小孝哉
尽そとづなはそのおの役目ふみわざと某かひて物読の師小聞さふ
父ハ我を生のりとかり母ハ我と鞠育あげあふ我を樹さむ
乳を多く長年一覆育我ふ心と尽して健ちるまきといく度め
顧こゆくふも意と回し我と腹ふ抱きぬかひと大小便とされむ
けくばとせまとその濡たる所や母のねあひやりけり所ふ我とやねきを
らう我さうやく成長してその恩徳を報んとそれともその恩の高大
かう変天の遙ふ高く窮きたがじとくよそたるく報せうそく変ふ
あふと詩經とのふ召ふあうとと示され一詞我おふあうとと

がりえと忘れをやむとたゞ寒氣ふゆうと凍死をもつて母の大恩
ふむるべ死マ某幼稚してつまどからりひをもとと食しと母と養ふ
足ざらんちとく悲を更のまゆりかうやうじとく某が更ふ心
とほひゑひを一日ゆゑ快氣なまゆりとくふも泣声をやむ
母よりもあやく看病する長吉が顔のいたく瘦ちそそとえんげく
母ハ何うとろひやう只むせつて泣けるを長吉ありとて背中と枕
高き詞とそとて母の心と慰る心のうちひやられて裏からそを
長吉つらうふ母の病をもく急不快氣あづれ様子をと快
きあたうち父のゆくとたづなを死もあくを少れふつけれ
ふつむゆかく貪ふと母の看病心の傍ふあうがに我女子のオ
ウムが此身を質ふ入ても貪苦と枚づくふ男子の身はれもあ

をばうへ仏神を祈りより外へとろひまわる寒さもつむき
母かへ深くゆして日ふ三度づ裸とやうり門口の井の水を汲て頭
より身ふそぞだ一七日うち間此苦行を修して仏神を祈りけま満
ぐえん願の日井の水を汲て盥ふらしけふやの乱中の金魚罐のうちも
とどうひとぬ長吉ひひとと目あれざり魚かねが大ふ怪しき盥のま
ちまくわゆき母の前小持行てスをけど母かねとそそうに前年の年夫
十郎左房門どの大明よとたゞくへ飯てゑひつ金魚とあふ魚不
似くら珍魚の井のうち不生よとづきのそれほ正是仏神汝孝心
から珍魚の井のうち不生よとづきのそれほ正是仏神汝孝心
を感トあひて此魚を乞ふ疑な唐土の孝子永ふ卧て
魚を得雪と穿て算と得たるひかん此魚は世ふまれたる
のやれ賣代あきびたと價を得べしもく街ふ持行てよと買入
と持べと命じけりと長吉の母の詞を聞て大ふ怪びつと魚を
なづきて街ふ出でまよの頃堺中好事の者かやまきれが果と
兩尾の金魚を小利七十両を賣てやうぬこれより堺ふ乱中の種と
りそれと堺種とりひりとぞやうと長吉ひゆひつけをあらくの金を得
て仏神の冥助親子の貪苦を救ひありがくと天地を拜して
益あひそれと何不足す母の病とえとんのとろひけふ一日信濃
の國のあらべの方より召簡を以て告越えの十郎左房門どの前の月笛吹
峠を肇鳥走数右房門ともよ者とおて立退きよし草をつゝも尋ず
心得の為告ヤととおほたる沖津ことと云読とひとと一声呼とまび
てをとせとが長吉あらう抱かに葉ととへ背中と撫ちじてまび



うらりけみどりと頭をあげると苦しげふ息がつきひけみさき
悲しきと聞りのま十郎左房門どの何等の遺恨あらずそ數右房門
を打ゆやぶじまよ十郎左房門どのみへりまくらに支と語りざれ
ひあもりまじきうそも鷺森數右房門とのあそちが爲ふ亂がりま
妹の舅から我命ある日もおがくらなく思ふぞらしくてう間
あくをじ我りと下総の真間の商人木幡屋弥次平とふ人の妻となり
て十七才の時一人の女子とうこそその女子十才の時やゑあらず離縁
親のりとふかづけりが兩夫ふまくあらわの女の才の本意とせざる所な
ども老父を養ためやじことと得ど縁こそありと十郎左房門ども
まえ再縁してあどやくそちをうらぬ前の夫弥次平の胤をまとめて
うらう女子の成長の後名と小梅といひ梅の与四兵衛とふ者の
妻とす今のお住所はまうかまうほども東国辺小住とまくされ
小梅とをちへ胤がりと同腹の兄弟あり初め梅の与四兵衛とふる鷺
森数右房門の子たりと聞十郎左房門どの数右房門をおあふとえ
汝弟兄弟已ふ敵同士とすつるあら折を得てくじて夫ふ語り小梅
が住家をなぐれなえぞひきれ親子の對面兄弟の名告ともさむべ
とかひてふひ居るふすまう宿世の悪縁を敵同士とすつるがよト
郎左房門どん人殺しの大罪を犯玉べばそのオの果ハ鷺鳥の餌と
かうふりんとくは定からとひて悲歎の涙ふむせざりとけりと長吉
があられそそ軽い志うありけりうそいふせん何とぞふたと母と額を
合せつ泣より外のことをすむに沖津へちりと病のうふがまあした
たうと聞氣力まもくよのうとたのことけち、スえければ長吉

妻とす今のお住所はまうかまうほども東国辺小住とまくされ
小梅とをちへ胤がりと同腹の兄弟あり初め梅の与四兵衛とふる鷺
森数右房門の子たりと聞十郎左房門どの数右房門をおあふとえ
汝弟兄弟已ふ敵同士とすつるあら折を得てくじて夫ふ語り小梅
が住家をなぐれなえぞひきれ親子の對面兄弟の名告ともさむべ
とかひてふひ居るふすまう宿世の悪縁を敵同士とすつるがよト
郎左房門どん人殺しの大罪を犯玉べばそのオの果ハ鷺鳥の餌と
かうふりんとくは定からとひて悲歎の涙ふむせざりとけりと長吉
があられそそ軽い志うありけりうそいふせん何とぞふたと母と額を
合せつ泣より外のことをすむに沖津へちりと病のうふがまあした
たうと聞氣力まもくよのうとたのことけち、スえければ長吉

ハ父と母との兩難義我オ一つふ集アセ何と云へ思案りやくを
心ナラシムわらうかと

○第七 韻 梅為搖鏡對

そねの初おと爰ふまゝ唐琴浦右房門ヶ弟滝次郎ハ兄浦右房門_左花
小數右房門_右かづまおふなうつことと深く悲_左生從の屍_右を葬て七日
くの追善_左とやうやうとふ日數_右もたちければ主君_左ハ願_右昏_左をさ
げあがくあんとゑとゑつと兄敵_左をあしめ玉_右いれじと願_左ければ主君
されどまにゆきとて左ふおあざれ面前_左ふせよびて盃_右を玉_左と願_右の
えあとあがくゆとゑとほろとあひととあひとと首尾よく敵_左をあふせ_右敵_左
全_左と一腰_右の刀_左と一面_右の鏡_左ととう出_右てまとのゑひけ_左ハ此刀_右ハ
玉骨_左とあづけ此鏡_左ハ冰姿_右こちがくとみふ我秘藏_左の物_右とづ

汝_左ノ才_右と主護_左もに靈物_右なれば志_左くや_右あくるやうととあらり
けむべ滝次郎_左の恩惠_右の厚_左と感_右て落淚_左一茶_右いと名すして私
宅_左ふやくもたまふ塵_右のよをあひをうの_左又劍鏡_右を承_左ふつて僻袖助
人_左を具_右一古鄉_左の霧_右を背_左后_右不_左古_右客路_左の雲_右を眼前_左ふ_右せん_左と
も主從二人東國_左の方_右をこうさ_左ても出_右ぬだけ_左あく_右えん_左
○此時小串貞行_左ハ鎌倉_右より坂国_左して信州_右の本館_左ふあく_右滝次郎
ハかとて愛臣_左あるゆまふ劍鏡_右を以_左玉_右にたゞひの恩_左備_右あはに_左ぞ
御玉骨_左刀_右冰姿_左鏡_右のよれその靈驗_左ある_右の后編_左ふつまびうり
發児_左の時_右と待得_左をそよ_右し

爰_左ふまく武藏_右国_左芝崎村_右ある所_左ふ梅_右の与_左四兵衛_右とくふ者_左あり_右けと妻_左を
小梅_左とくふ夫婦_右とも_左ふ梅_右を以_左て名_右とあることゆま_左ゆまぞやうれ_右家

の前 まへ ふ大 おほ ちう 梅の木 あつましの 梅寒中より 花をひづれ 實をむを
ふこと 磨石とくの數をあつと 与四兵房家 貪りとひとも 每年此梅
の実をともと 梅わさとくのりを 制衣して 売賣 代は 衣食の料とひま
夫婦 めうふ 一年を おこなひりぬ 湿染をあと ふ梅むきとくふのちくをま
ぐみねが 茜屋らもまそひて これを外へあつゆま不別みちうりひとせまれ
ども 各別の 困窮も ちくへ ひしけり 与四兵房常 つね ふりひけりの林和靖三
百六十株の梅を植 一株の実を以て 一日の費ふあにと 用我家の梅も
衣食と生る 宝木を 実是 摺錢樹 こづかのじゆ カみねが まろを まへがにとて あ
なま衣服を ゆきらなす 時へ まへ 梅の木ふそまくのちふと直とを 着日く
の食物も まへ 梅ふそまくのちふ それを 食一 夜卧ふも まの木の木と 跡
ふせむ 深く 尊敬し けりが 草木 まわたりと つどもの木 もまきもの誠

心を感心ト けまや 実のうこと 年ぐましぬ これよりて 里人等異名絶
稱 めい ふ梅の与四兵房ともひ妻とも 小梅とよびりとぞさて 一日ツメ 轉
梢小鳥あまうて 哇こといと 悲しげふ鳴与四兵房耳とせうかとぞを
も鳥す死のつうそまよと妻ふむひとひきふ 我らのぢう連夜
夢えあく殊ふの鳥の悲鳴とひ若信州ふあひと親人の脚病氣
もあひやとひくきふせうそじさまふあひともひきく音信と聞ざ
ひがちうそもひ信州ふりうて脚安否をとんとひく折あしれ
足痛ふを歩行たまねば せんそく まくせと飛脚をせとひて 安否を問
んとひくひとひとひく覗引よせと 体状を まくめなまく、妻小梅れ
と聞親人まゆを老年ふあひあふ 何とせば方へよひとり玉を
やとふと四兵房のひけり我ゆ志もとゆゑふ對面のをびく仕を

辭一も家ふたりと老を安ら養ふともあつてどもひく汝が幼年の
時我養育しゆゑたと今御主人の御慈惠を為人ぬ共
たと一生勤死すともその大恩へかうれど手足のをもくらひ
ほえと辞す意をしなれも子や急の忠義とるとの爲め急
二言とゆき詞すくされまでか過ぬとくみを小梅又のそく年
老あふ男へひくしむちからずせり一日をもあうて孝行に
ましめざく妾が才ふとうて不本意のひくふゆひを何と御
飯國あゆす又もおもむりあげとじよとひてたちて葛籠よ
てあひた木縫を以布子と一つ取りし妾が手織のあやなされ
そろびの此一品せんそ寒夜のち寝巻ふかんだけをされじと
ひそひそ木曾の麻衣間遠ぢる便と同人端からきを

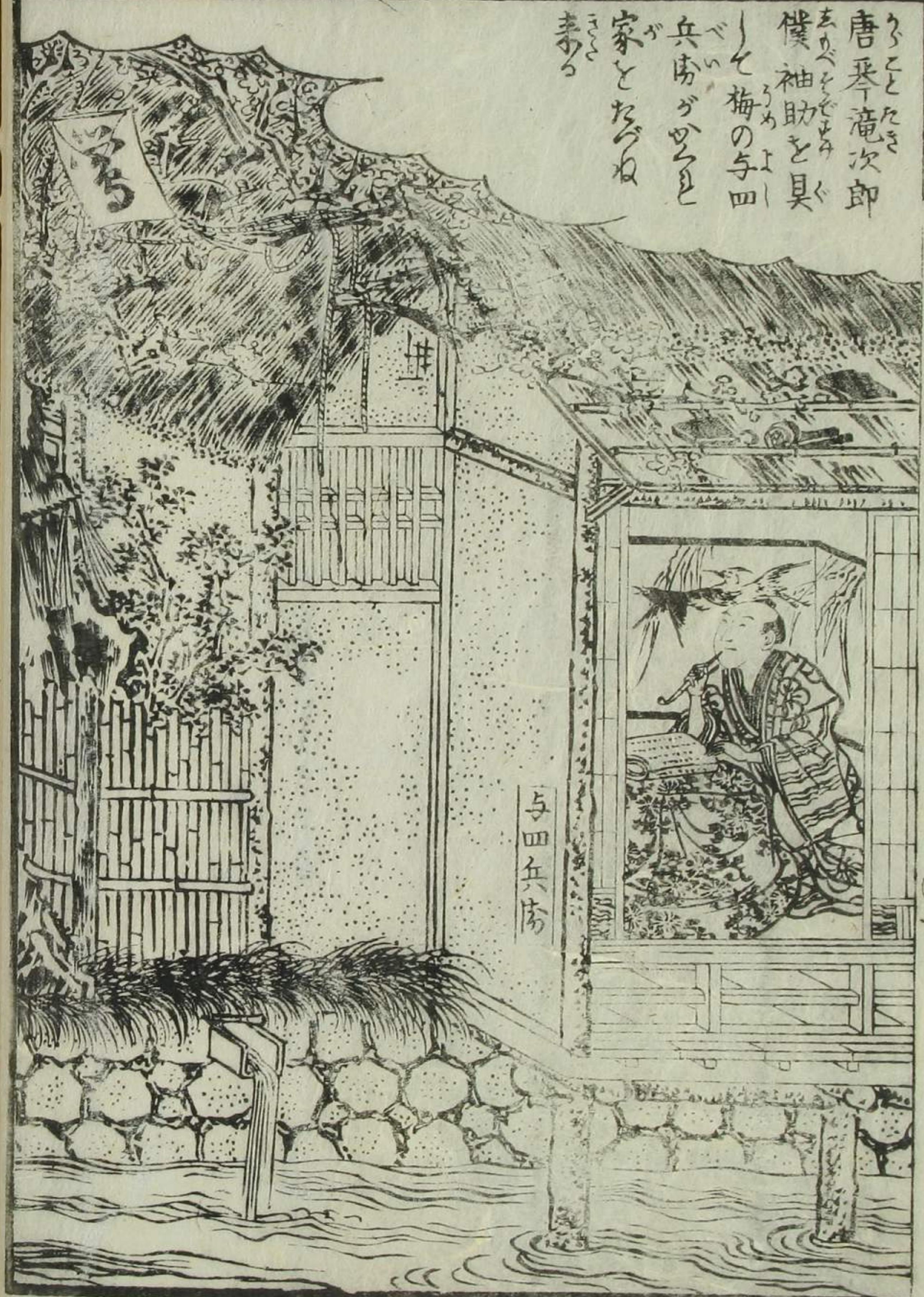
ひら折一も外の方ふ梅の与四兵房宅へされりやと案内を乞人
ありと小梅立出て柴の折戸と排ひだるそねば十五六才の美麗麗
若衆大小立派猿将束菅の小笠をながみてたゞぞと從者と
おびくあとつまひいと健やう若者なり小梅ハ腰とひらつひふえ
うけやまうん歴この御案内と四兵房ふ何の御用のゆそと
懲懃ふあらばやの義次年ひけり某こと信州小串の家臣
唐琴浦右房門が第滝次郎とふ者たりとのまことひもをさ
ふと四兵房ゆのうげをとどく同足の痛もむちあひとて門口まで膝
行出まくらしや滝次郎君ふひのけりあん目え何等の御使
ありて此武藏のもとまでをうけた道をゆく出あじしそ見え事わべ
外ふ供の人もなく袖助をうそと具せらじゆじきよと相のぐ

此があらるる理ありの子細へ一回ふかとて云へばくとよふ
やぞりさまづうれどひて一間の塵とおねひて上壁ふ花莞筵
と繫くみうねが小梅こくわいのひじく盥たま水をなべて滝次郎が足あしをも
ざなび夫婦めおと礼義れいぎと尽つくみを滝次郎まうけの席せきふうち通す
与四兵房よしやうまづ小梅こくわいを滝次郎がまふ出だて目めをさせ袖助そすけへたび
ぐまえなる者ものからばされゆる妻めを引合せ埋火うまいのを茶ぢゃのと夫
婦ふみが何なんととほとほふ氣きとはくべ滝次郎もくまべと心こころひ无用むよう
と押おしりと四兵房よしやうとちうばをひけり某此度たびの旅行別儀りゆうべつぎ不あらず
ぬくものゆゑとからとまんとのひとまう波なみとさよおにて兄浦右房門
姫藻ひめもの花はなをめくらす始はじより浦右房門うらうわう鑑倉在勤ざいしんの留主りゅうしゅ蓑文太もみぶんたと
落通おちゆきの支えかまび藻もの花はなと害いたたくりの金三百両さんびやうと主君しゅきんより蓑

立たたる鶴藤四郎つるとうの力を奪ひて兩人りにん出奔しゆんたり更藻さらの花はなが怨魂怨えん
魚うお不還着ふかきしたる夏浦右房門なつうらうわうと異ことて妻め敵打てきとう小出こしゆ笛吹峠ふげいとうを浦右
房門うらうわう蓑文太もみぶんたとせよと數右房門すううらうわう助太刀すけたとうの者もの不あむとら更ま
でその始終しゆうをほゞふかくとせよと四兵房よしやうこれと引ひてあまきとをま
詞こともりを小梅こくわいのあたまあたまおどろて持もう土瓶どひんを圍爐裏いりふかじと
たう灰ご不目ふめもあでその傍そばをかくらる滝次郎がまひてひけりがどら
きらかの理ことわりすれふつまは度たま某主君みゆきふひとゑと願ねがひひりの蓑文太もみぶんた
ゆくふ翠すいの兄あの仇かたをもひ鎧藤四郎つるとうの力をもひじて唐琴とうきんの家再
奥おくをねぐらん爲ため旅路りゆうへ出でそもひ袖助そすけがまひより出でて四兵房よしやう
むかかくの御親父ごくんじ数右房門すううらうわうより敵てき粟野十郎こなのじゅうろう左房門さわうとつよ者ものを
泉州くにな城しろふ住武士しゆの浪人なにがしのはしゃくもをかしこと向むかしものゆゑを

唐琴十瀧次郎
去りてそぞくく
僕袖助と具
と梅の与四
兵房がつるを
家となむ

与四兵房



袖助

瀧次郎

梅林 卷之四

ちゆて父の仇ともひとと小梅うち間をまことふちよ死への
うちひげの夫ひきどもさざれどもその粟野十郎左房門どのとよ
へ妻が幼少の時別れち実の母の再縁へ夫ふくらむに長吉と
つ男子をうみあふとゐるがゆくと一度尋行なえをひきに對面
ととひふ敵同士とからうへりやう宿世の悪縁ぞは蔓と夫ふくらむ
妻も敵ふ縁ある者と離別へゑんへ必定かりまこと語うざまこと
よまざかまべやのまこととこうたゆむととめ思案され
がたゞ語るもの折とえ合せかくらや人と心一つまと居る胸のうち
の色さへ何ふたうんせきのほに四兵衛へ小梅が心のうちとつておき
父の敵の姓名あきとまへせきの幸ひうさうとあく父の仇もうま
ちゆまの御主人の敵ふりびえ助太刀と侍りまづその蓑文太と妻ふ
と打て后父の仇とも報せ一夫ふくらむ口とんに折刀を拙者
足痛家のうちもあゆじ更醫ひれ心の矢猛ふくらむともあん
供と仕うがにじまどもあん心せきありが何とぞ志バーの間拙宅
ふかん逗留がくられじかのを一念の誠と以て痛と治一あん供と仕
ふ一とくべ滝次郎汝が忠志へ過分なり草葉のむげを兄うも
きを賞美へあづめきりやうう袖助の僕あづめよく剣法を
まえび得てあく力量をうとたれば事ふのとぞと氣づひは汝へ
只片時もあく痛と治一泉州ふ赴て敵の手ひくとすとあそ
ゆくと尋ねて父の仇とむくあべくのうまかとなひことの
あん我ゆきまく此通うととひて國ぐ宿ぐの心あととひとあそ
ち小紙とあく我立寄へ汝ふ夏の子細をがくん爲そ

ゆきさきか心せりべあがへも猶豫しやじとひまく立あづればせあ
て午飯のちうけととぞむとども滝次郎とまうびに体やうぶ
与四兵房いせんをべりく只もうとうに此足と膝を拭ひをひ出て小
梅ども下門おひし御如才りあつまめが旅中ど大事ふみけゑ袖助
どよく氣をほけをあげられよとふ折しも梅の梢ふ寫のひとく
と轉わば滝次郎顧てよも年之内なまふきするやにした鳥の音や梅
の音も花の兄連枝の我おずの門出をとふ一声を首尾よく敵
とわすを梅の花笠着て坂う時節とまことに四兵房夫婦袖助
すみとよびらくのそがりつけられぬめて滝次郎ハ蓑文
太刀所縁の者常陸の国すありと國若の地小出行ともあれどと
るひ常陸の國とらうばして入間川みじがたけふむひの方

四五輩の醉狂人ども来ゆき滝次郎が羨慕する姿とアソテ道をよ
ぎさすもうじて少年人よりて立て酒店ふりて我くが酒の相人せよ
ゆきとひつ手とそりて引立せんとを滝次郎ハ不礼至極と心の
うちか憤とる大変とゆきるおほしあれば怒と忍と慇懃
腰をゆめくひにしきりゆく道と急ぐ旅人ふりがん免へく
きとじとようとく詞ふあはれを酒とくふうをあべれと嘗てとひ
う指頭ふ噬と吐ゆけを滝次郎が口をまぶしゆきと傍若无人の体と
そを袖助と云ふ押へども今主人のやとごく、さととひとひの旅
をぬきまくよ道とひにて通へざれじと怒の色とやくにしてあ
くみびけ前みみ一髭男眼をつらげゆくを刀劍城
横たう者ゆづり出へてゆそあとひくとひとひとびつぐ

ちくす是非とも酒店の方をせんとりひそ 滝次郎グ胸ぐすと手
とよりてひまわしぬれ袖助今ハやむ更と得ど兩人のあうてびと差
右小姓と大地ふ童とたげほりそ滝次郎不目がいしもくみせんと
あくふかの者どもゆくさむ立まざる案もろ所汝等ハ新田桃
井^ウ和田棹の残黨原の姿とやつてあらゆくたゞんやうと
首とて鎌倉殿の恩賞ハあづからん覺悟せよとちくふよび
つもくとよりかとて手ふぐ刀と拔をもとて 滝次郎ハ人前て
手をもく合羽とぬぎを刀の柄と手とひれ袖助ありとて押留
大事をゆへんえをやうじとん手とくじよりべと此奴
等ごとき氣輩どもの物の数ふせどこの拙者ふませゆいか
こそ御見物あれじと押やねば辭狂人どもやうくとお笑舌

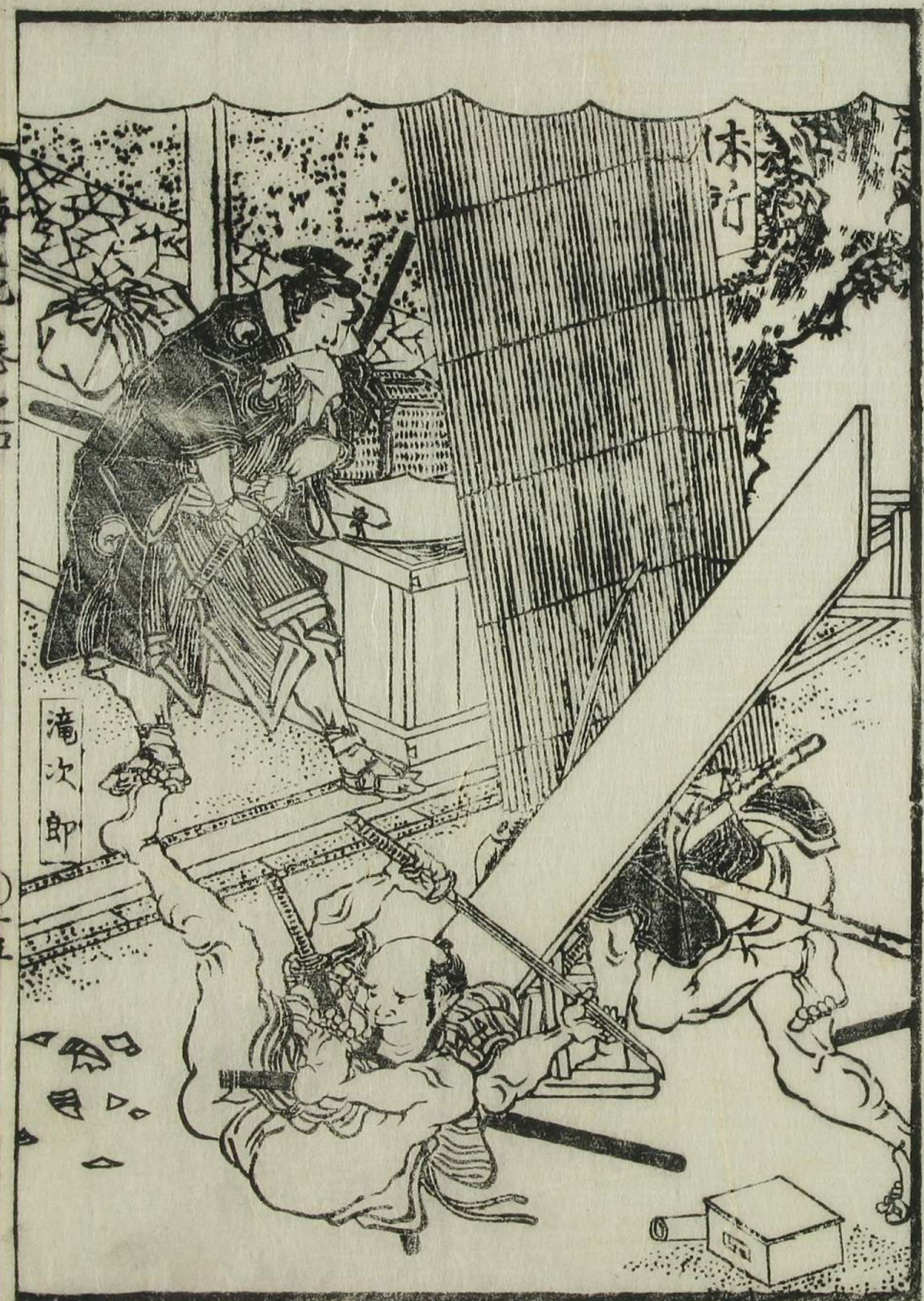
長き下郎めがや一一条やそくは世のゆゑとこ下せそくとん觀念
せよとよりとく 前後左右上段下段ふきとつけり袖助ハ
心中小刀小血なうてのちくのさゑとげとおりひつつかうふる
つる茶店の床机をとよてあとまへ雷光石火とひくや太刀
とちくとおおひく 左右の足をもくじ胸板脇の
用捨やく踏たよ一踢たふ一けひとがゆの者どもつひふ敵しきこと
あるを刀を肩ふりびきと遊なぬ袖助ハこよひそて詞ふ似合
ぬ腰抜どもとてあざつひつ汗とねびひて居まうけとまそ 滝
次郎かとより立て袖助がたゞれを賞ドつひふ主從お連
てゆきざゆきぬ

○第八齣

剪刀狂 拂雪女

袖助武州入間川
かと醉狂人ふ遇
勇とうす

袖助



出羽越後の壞ふ葡萄峠と同えの山の間と深くたゞひまられる嶺路たり殊ふ北地第一の雪所にて谷がけより四時とも小雪箇をえき三冬より春ふりうそく数丈の積雪路往をうづみて樹林岩石もえり。誠ふ玉どりを造つてたゞ山の如くさるねども冬月初春の間へ常ふ雪あそして雪巻風車輪のごとくふ吹めざむこれある者忽雪中ふうぶまれて魄魄をとふとす者多くありぞ峯よりあつて雪頬の大山の崩れらふ異なむをそのひよき百千の雷の一度ふ声を発するが如くみて旅客の肝をりやにしむ誠ふ希有の難所なりさて曰鳥蓑文太機等兩人のゆくへゆまとちがゆふかの三百両の金鎧藤四郎の刀も及骨折て死るの獲物となりぬとせんもべなく棧が冰ふ龍衣たり衣服を賣代あつて

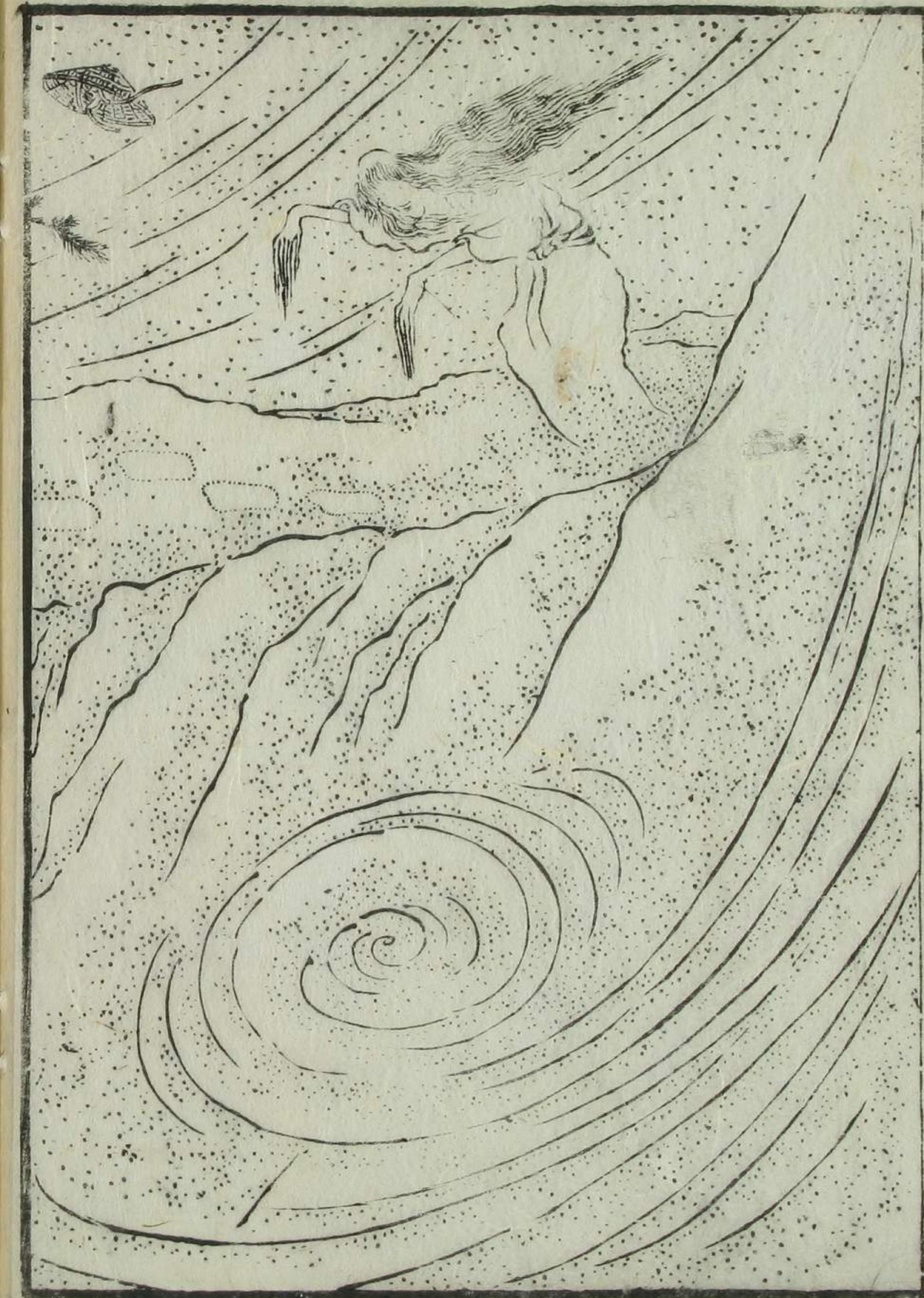
路銀とすと連立て越後の國ふからまうがり葡萄峠の谷
険ふある一げなく荒屋のあらどりとてからむ住けりが前ふ記せ
ごく山深き所かれば耳ふ満るゆの溪水の漲る音猛歎の吼声
眼ふ遮るゆの松林ふとぎ露竹叢ふちう烟のこぢりがるゆせま
住家も棧の愛情ふ心ひられて侘いしものと一日二日と過へり
始のわざと蓑文太ら箭をなげみて山中を奔走し鳥歎をと
て麥粟ふりはりふ飢をあひぼうやどりく冬の半ふりうけり
ば日く夜くふ雪あり路逕としづく特もうまくあくびばくとて
餓死へと思案すの悪計をひつき頭ふ白苧となどをじ
面ふ白粉をとどヒオカの白布をまといて世ふ称す雪女ともす
姿ふ打扮夜く葡萄峠の要路ふ出て往来の旅人をおどろきめ

衣服 錢財と奪てその日くとあらずぬさをあり夜常よりも
ち不雪つゝくゆて乱世訪て揚として五脣を飛とがごとき
雪中ふ蓑文太の雪女小打拂てたゞびよれ旅人や来る
と待けふひみの峠道とづひて一人の旅客峯葉りて編る
雪帽子をゆふと着蒲摩手とかけ出菅の脛中をまと
ひ薬減をむもし核をなき。長剣をよそへおどそよりでくらて
明松とゆとし益つゝ降雪を打ちひつあらとちざめをま
え来ぬ蓑文太心のうちかぞれ此難所を連ゆりく唯独廻る
ハ膳太き奴を試ふひとおどじよして又んとまづ手練の雪碟
と打て明松の大と消えとちがく立ふきだり垂氷の二三事頭
とあげてしまひけむべかの旅人雪明ふとじへとある怪

や寒國雪の精凝集うして怪しき形とあらと同く汝の世
ふゆ雪をなしハ鬼魅魍魎の仕業なり何やもあれ目ふゆのえ
其とよひつ長剣と抜てまづつけたゞ蓑文太の冒て早業の達人
かねが勿心オとひめりてかれと避ゆくさりつる刀を飛とえ足を飛
しと踢たふえとく折しと雪巻風さりと吹来とけふと蓑文
太の身をふそれと避るの旅人の雪風をまくる法とあらと立居
たゞ忽吹たまれて遙の谷間を落たうけ蓑文太の谷ふぐり
て捕ふもづくじむぎ骨を折り更とつづき又もさき旅人の未
夢スルとあらと數十丈落しが雪の埋み残せりの梢不落
かれてとすりぬ手足腰などおされど寒氣をもの痛と

おがえをやうくその梢を拔出るとともにま下の谷へ万仞の岩壁をとねをとんとんとあへて
てきりづくもあざぞ飯豆の殻をそらすれあれ更よかにし翼よまきおひいふ
ふともせんまづかくあとんど進退を失ひけ所とふ力草ふとりつき居
たる小枝をわきと折て又雪のうへととびうち中なかをどより首の方
さはゑふやうて落すやどふ息いきがふとぞつひふ數十丈の谷底くびふあち
とくまうぬ此所も又雪深く木の根岩尖ねいわもええざるをどつりうと
たれが幸まことふと身體恙からはとども上うとえあぐねが岩壁いわ今ふも頭
のうへふおちおちからすすおがえ上うと雪ゆきあへのおちおちまぶんこの氣
づくく唯肝なまをひくぬ下くだり谷川たに流りゅう足あしの下くだ雪ゆきとびそ岩いわ不せ
る水音みずおとこをきく邊へくひづれを西にし雪ゆきを踏ふ抜ぬて谷川たにふおちおちりんりんを危
いがくのりふがくをあみあみせとぞ寒氣皮肉ひにくふとあくと手凍

是軟手じめの指屈さきすすきすすき小赤あかのうつそ恰あも小鰐こいの腰こしのこじ衣服
へ雪水ゆきみず小濡ぬれとすて眉毛まゆ髭ひげ不垂冰つらひさざさざとて十分の難義なんぎつづ
もありゆべ長あく此所こ小あづか凍死こがぬべーと志しと励はげーと只走ただ走はしふは
て半里さんりむくらやまをやりく道みちあり所ところふ出でぬそをむひの方ほうふ灯火とうひの
光ひかりをやまくとひづくまをえけび人家じやうやあと心こころうれしくのまだ
白しらそつまふ果ごくとくづれかくまう小家こいえを雪深ゆきふかくうづと簷のきせ
垂水たるみずの劍つるぎとさうおゑふやけたゞぐらふ異ことなむと立たつては宋その戸
とわとくと打ちけがやく用もちつけてあにじの女めのわとおだへたあくびあくび
出来あて寐ねがれう声こゑを夫めのわのうゑふうとつゆをとくとくれ
雪道ゆきぢ不踏迷ふひう旅たびの者ものふいきん情じようふ一夜よをあきせをとまれじと
りあにじの女めのわの案あんすやうふあひしがかうもづきこの大雪おほゆき

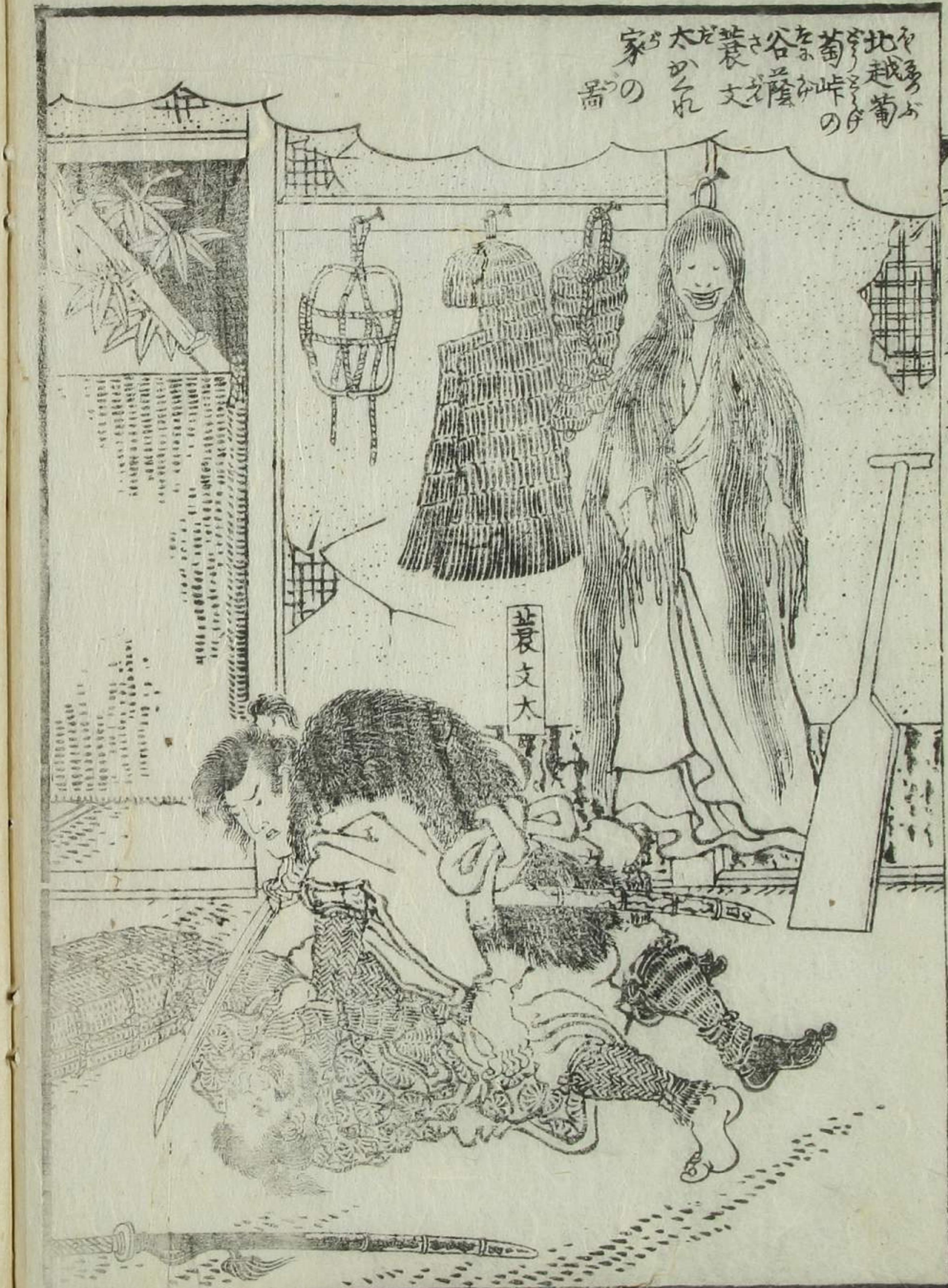


夜中の道をとむ宿あり おがさきんから荒屋をいとひ玉ひといふも
お宿やんのぎこあくとを折戸をひくとむるよどび旅人たびて
早速の御承引せにけたゞとを蓑帽子をぬぎ棧をとく脛巾
をもとくんとせうぐ寒氣ふそちをつまをぬもとぶと女キヌをとみ
火ふあそあひおのづくとけすん且ハコもさをもちのぎゑとりひと
枯松葉をとく来已土同ふましきれの圍炉裏ふぢくべてゆくぐ
あくとくとくかぞ旅人圍炉裏小足をくみのをを折りゆもと
燃立火の光アシタガヒふ顔とえ合せてあほの女声もげしく汝へ
前の月木曾山の古社を妻とくとおも三百両の金と名作の刀を
奪ひゆまくる盗人ふあうどりとくらちきも敬驚きいきな汝を
時の女ナリラであひへり墨の汝が不運小づく銀のたくりあ

べとくひせゆもといひやかのとあひと女を捕へてのけまぬふかーたビ
氷を刀と抜て胸をふ押当めどく危くアヌマチ所み田鳥せ蓑文
太雪女の持衣束と一そくの酒と鮭の塩引をうて合せて肩をこ
げ懐手と我家の門をゆき來一がほ体をえまうつと走り入
がの盗人の腕をとて逆ふねぢあげ何奴ナリ狼藉ナリと
誓ハ桟ヤズ起あひて前の月金と刀を奪ひゆまくる盗人ハば者や
とくふを蓑文太ヰ同きくまがと油断のひぬふや盗人とも
一腕とふをやどさねひ転ふまうへけたゞ蓑文太い更ともせを躍
あひて飛ニテとくまじまうひを避つひふかと蹴足ふと
高手小手ふくしあげその模様をつくりとさむかど峰を谷
あひふおちもましく汝ナリ鉤をのぶとだりとくども又綱ふゆ

つてあきよ我へ是さざれとの雪女たうとちりあせけいとがの盗入先
念くと歯ぐき一ツ蓑文太さわぶらをよく石ねばゆまと面ふ白粉残す
女もおよびぬ義男ひきんたうと蓑文太さわぶらへ炉辺ふよりて棧さじふゆとくま
の酒さけをあくらませゆふあぐる居て酒さけをのよつ盜人ぬきひとふむう汝
前さき小奪くわひきうる三百両の金と鎬あ簾れん四郎よしろうの刀へいきせしぞよくあき
らふゆきを命めいをうへたまくべし。へりそ吾わよとみ盜入ぬきひとゆく
ハ某武藝未熟なまふとくひん家けん小敵こだまう吏じあくひをかく死地しじふおち
入いたれ何なきつミヤモトミヤモト某モモクハ元来篠紫しのざいの海賊かいぞく郷音洋武ようぶと
ヤモ者やものりうりう頃ごろ彼かれ地じあく菊地きくち大友おおともの軍ぐんおつま山中海さんちうかい辺へんふ至いた
ままで軍ぐん兵へい等とうの住家すみやとからうて我輩わがもみたうひをあまと吏じあくひがれ
べせんまくやくかの地ちとのぐれ出で木曾きその辺へんとさゑよひあうさ偶うど

の古社こやしみては婦人ふじんのあやしげたうさゑて独ひとりひそて居ゐふと見え
まづめて物ものあとんと推量すうりょうつひふ三百両の金と力ぢを奪だつひとり力ぢ
路上じゆじゆを賣う代しろままその金も三百両の金ととりふ骨柳こいののうちふあま
て其そあひ夜中よちゆう山道さんみちをゆきけるふ半途はんと不お於おそくと繩のゆき骨柳こいのを
谷川たにがわふとにしてゆくへ志しとをやうとせうとせうと運う命めいのつま
きと歎息なげきせうての身みとよもう所ところとひけふえうと一人の
小賊こくせき小こ出で会あいをの賊賊のゆきとけり和田わだの残黨ざんとう能尾のうお十郎じゅうろうとつ
者もの今羽明はやみ男麻山おとこやま小寨ささいをゆきて山さんをりて野の伏ふく強盜きょうとうをあき
集あついふと蛇丸へびまると名なとああたられて頭領とうりゆうとやう ああ味方みがたを集あつい
たり我われじとと手下しもの者ものを諸国しょくこくふつぶつ軍用ぐんようの爲ため一藝いぎある者もの
をえふと味方みがたふつけむすりとも寨さい中なかふと錢財せんざいして一點いつてんの不足ふそく



汝のひ立る一毳あぐべをゆ、かの山ゆりうて味方みくらむとと竹の
割符と山ふのぢり間道引路の圖と与へり。又大ふ力を得某より
て水練手達一り。ばそれとりひきとふ味方せんと心とすまわるかの地
のをぐとそ已ふ此辺を通りし。今ヤヒゲどとくかの力ハ賣代は金へあ
まうて残らざ失ひぬがせんとび。金お一けをばこととなすとうもをあれ
何とぞ一命をあんたとけをまことにじとくが蓑文太頭をふすと動
あまくまくまうりうとやまんかの金と刀ハ汝りがく。がしおくわん
返答いふとひて眼をあらげ明晃とたう刀と目ささよつとつを
よ盗人の多く此場ふいづうといをうつうとやんやめの金あふ。何
しもがる大雪をおじて銀雞の旅とりにじやさんやは一隻とひて
都てうらうふあぐれ更と察。一更の竹符も引路の圖も某が
懷中ふあくとこせばえとくとひとちふみを蓑文太がれ
が懷と探てるふみの詞ふだらを二つの物ありケルがとせ成引
出一つシクスニあがく思案の体かしがやを莞尔と笑ひともち
うまつまつとおちあぐれと刀をうそよとえーが盜人の頭たちま
ち前ふをまうびけり桟それとを柄杓ふ水をくもうりて血刀ふを
ぎ手巾をとりて拭ひつ何ゆゑひとう笑ふみの意解。やくと
りふが蓑文太まう刀をあくめ一旦かどふ物をうづりしの大ヤク禍
とくふもよくび又かどふ手より此二品を得て一場の福を得良
計あもその計の子細ひゆくゆくゆくとぞくえけるみの謀
あふト。いと
何尋の吉又をなきよゆの手もあふぞその子細をあくんと要

廿二
梅花水裂中冊終

廿三

廿二
且次の巻試読得をあきまへ

